

Top

トップと語る

★79

interview

鍋屋バイテック会社



鍋屋バイテック会社 代表取締役社長

岡本 友二郎 氏

◎聞き手

十六総合研究所 代表取締役社長 澤田 大輔

OKAMOTO Yujiro

Nabeya Bi-tech Kaisha

**「資本主義」ではなく「民主主義」の共同体でありたい。
「会社はみんなのもの」であり、そこで一緒に働く社員を
大切にしたいと考えています。**

岐阜県関市に拠点を置く鍋屋バイテック会社。1560年(永禄3年)、織田信長が桶狭間の戦いで勝利した年から続く重厚な歴史を持つ機械要素部品メーカーです。鋳物製造を起源とし、その伝統技術を基盤に、現在はプーリー、ミニチュアカップリング、特殊ねじ、機械要素・メカトロニクス部品や直動サポート部品など、最先端の精密部品を開発・製造しています。ファクトリーオートメーション機器や半導体製造装置など幅広い産業分野を支え、伝統と革新を両立させながら世界へ高品質な製品を供給するグローバル企業です。

鍋屋バイテック会社 代表取締役社長

岡本 友二郎 氏

◎聞き手

十六総合研究所 代表取締役社長 澤田 大輔

今回は、鍋屋バイテック会社 本社をお訪ねし、代表取締役社長 岡本 友二郎氏からお話を伺いました。

「株式会社」の枠組みを超え、 「民主主義」の共同体へ



十六総合研究所
代表取締役社長 澤田 大輔

—— 長きにわたる歩みの中で、2001年に社名を「鍋屋工業株式会社」から「鍋屋バイテック会社」へと変更されました。まずは、この社名に込められた思いからお聞かせいただけますか。

●岡本社長（以下、敬称略）：「鍋屋」は、代々鋳物で鍋を作ってきた屋号に由来する、私たちが継承すべき大切な名前です。そこに、自転車(Bicycle)と同じく「2つの」を意味する「バイ」と、「テクノロジー」を掛け合わせて、「バイテック(Bi-tech)」という造語を組み合わせました。これは、伝統的な鋳物技術と、それ以外の新しい技術を融合させていくという決意を込めたものです。

—— 通称や英文社名から「株式会社」という言葉を外し、あえて「会社(Kaisha)」とされている点に強いポリシーを感じます。

●岡本：法人格としては「株式会社」ですが、名称を「会社」とした理由は、一言で言えば「資本主義」ではなく「民主主義」の共同体でありたいという想いです。一般的なロジックでは「会社は株主のもの」とされがちですが、私たちは「会社はみんなのもの」であり、そこで一緒に働く社員を大切にしたいと考えています。この「共同体」としての在り方を明確にするために、あえて「株式会社」という枠組みを超えた「会社」という呼称にこだわっているのです。

採用は能力よりも人間性を重視

—— その「共同体」という考え方は、採用や人材育成にも色濃く反映されているのではないのでしょうか。採用にあたってどのような点を重視されていますか。

●岡本：能力や学歴以上に、「当社の社風に合うかどうか」を最優先に見ます。具体的には、挨拶をきちんとする、といった人間としての基本や、カイゼン活動や資格取得に積極的に挑む「向上心」などです。やる気さえあれば、能力は必ず後からついてきます。

人材育成については、社内では活発にジョブローテーションを行っています。さまざまな業務に携わる中で、幅広い知見を持つことができ、結果としてその人の人生を豊かにすると信じています。



ものづくりを支える、20万点の圧倒的ラインアップ



公園の中の自然豊かな工場「関工園」



銅屋バイテック会社
代表取締役社長 岡本 友二郎氏

—— 資格取得の奨励についても、非常にユニークな方針を取られていますね。

●岡本：以前から事務系・現場系を問わず、簿記や技能検定などのビジネス資格を広く推奨してきました。2024年にテレビ番組「がちりマンデー!!」に出演したことをきっかけに、これをさらに活性化させようと、趣味系の資格取得も認めるようにしました。現在では、船舶免許、ゴルフ検定、スキー検定、さらには空手・合気道・柔道といった武道やラジオ体操指導士なども対象に広がっています。

—— 趣味の資格が、仕事にどのようなプラスの影

響を与えるのでしょうか。

●岡本：例えば船舶免許を持つ人は釣りを嗜んでいることが多く、社内のランチタイムなどで共通の話題として花が咲きます。また、名刺にこうした資格を記載することで、お客さまや協力パートナー先の方とのコミュニケーションのきっかけにもなります。誰がどの資格を持っているかを現場に掲示することで、お互いのやる気を刺激し合う効果も出ています。こうした「横や斜めのつながり」は、新しい商品を生み出す際に極めて重要です。商品開発には部門間の連携が不可欠ですが、趣味を通じたネットワークが、自然と他部署との意思疎通をスムーズにしてくれるのです。

下請けからの脱却と 「超ロングテール」戦略

—— 貴社は多品種・少量生産のイメージが強いですが、現在は「標準品」のラインアップが充実しているそうですね。

●岡本：鋳物の中で標準品を作ったことが当社の強みとなりました。鋳物業は、自動車関連企業など大手企業の下請けになりやすく、図面通りに作り、重量あたりの単価で量り売りするようなビ



対談風景

鍋屋バイテック会社 代表取締役社長
岡本 友二郎氏(右)、
十六総合研究所 代表取締役社長
澤田 大輔(左)

ジネススタイルに陥りがちです。自分たちで価格・価値を決めることができない厳しい世界から脱却するために、自ら設計・製造・販売を行う「自前主義」をポリシーとして、標準品を開拓してきました。現在は、標準品10万点、特殊品10万点の計20万点というラインアップを揃えています。

—— 20万点ものラインアップを揃えながら、「短納期」を実現するのは、バックヤードの構築も含めて大変なのではないでしょうか。

●岡本：当社では「多品種・変量・短納期」を掲げ、1本からのご注文にも即座に応えられる体制を整えています。これを支えるのが、独自の在庫管理と、国内外に広がる250社以上の協力パートナー先とのネットワークです。特にこだわっているのは、数年前に打ち出した「商品の廃止をしな

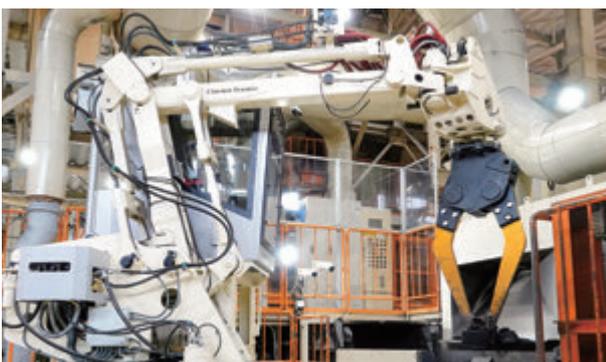
い」という方針です。

—— 商品を廃止しない、というのは在庫コストの面で大きなリスクになりませんか。

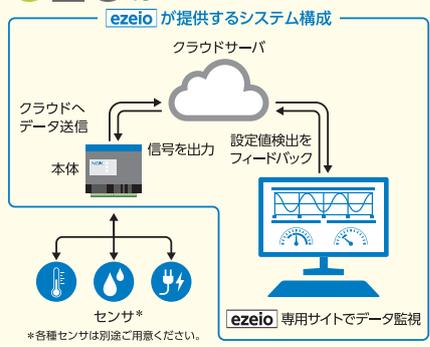
●岡本：一般的な経営判断では在庫圧縮が優先されますが、私たちは、「超ロングテール」という考え方を取っています。分析データによると、当社の製品は一度採用されると、20~25%の確率でその後もずっと使われ続けることがわかっています。今年の売上は、今年売ったものではなく、数年前からの積み重ねによって作られているのです。いつ必要とされるかわからないけれど、必要とされた瞬間に必ず在庫がある。その信頼こそが、私たちの強みです。

—— 供給体制を支える協力会社様との関係性も非常に深いですね。

●岡本：私たちは協力会社様を大切なパートナーと考えています。年に一度、パートナーシップを結んでいる会社様に集まっていただく「NBK未来の会」という会合を開催していますが、コロナ禍などの危機の際にお互いを支え合った経験を経て、より強固な信頼関係を築くことができます。



遠隔操作や自動化で、鑄造現場の安全と快適を追求



自社開発の遠隔監視システム
「ezeio(イーゼー・アイ・オー)」



アグリテックへの挑戦。スマート農業を実践する「バイテックファーム」

第三のテック「アグリテック」で描く、社員の未来

—— 近年、新たな挑戦として「コーヒー栽培」を始めたのと伺いました。製造業である貴社がなぜ農業に参入されたのでしょうか。

●岡本：背景には、当社の「ひょうたん型」の人口構成があります。今、60代は比較的少なく、50代から増え始め、40代でまた少し減り、30代で多くなるという構成です。将来、50代・40代の社員が定年を迎える頃、現場の検査や梱包といった仕事はAIや自動化によって置き換わっているでしょう。そのとき、高齢になった社員たちが誇りを持って、かつ採算を確保しながら働ける場所を作りたいと考えたのが始まりです。伝統技術、新技術に続く、第三のテックとして「アグリテック(農業技術)」を立ち上げました。

—— そこで「コーヒー」を選んだ理由は何だったのですか。

●岡本：せっかくやるなら岐阜ではあまり挑戦されていない、付加価値の高いものをやろうと思いました。そこで、高級品種のコーヒー生産に挑むことにしました。しかし、岐阜の気候で育てるのは一筋縄ではいきませんでした。ビニールハウス



社員の未来を拓く「コーヒー栽培」

での栽培を始めた直後の4月、想定外の気温上昇により、ハウス内が50~60度になってしまったのです。高温になったことを知らせる緊急アラームは発動していたのですが、ちょうど来客対応中だったため、すぐに対応することができず、危うく全滅しかけました。

—— アラームが発動したということは、そのビニールハウスには遠隔監視ができる仕組みなどが整備されていたんですね。

●岡本：はい、もともと自社製品として持っていた「遠隔監視システム(ezeio)」をハウスに導入しており、換気などを自動化していました。現在は、このDX技術をさらに駆使して、自動でミスト噴射や水やりもできる安定した栽培環境を構築しています。

—— 自社のDX製品を農業に転用したわけですね。そのコーヒーはいつ頃味わえるのでしょうか。

●岡本：今は苗木の状態ですので、最短で2

年後くらいに豆が収穫できる予定です。将来的には、本社の敷地内にある『岐阜現代美術館』の横にカフェを造り、そこで「桃紅(とうこう)コーヒー」として提供したいという構想を描いています。

伝統とアート、そしてグローバルな未来へ

—— 美術館のお話が出ましたが、貴社と篠田桃紅氏の絆は非常に深いものがあります。オフィスに桃紅氏の作品を飾るだけでなく、世界有数のコレクションを有する『岐阜現代美術館』まで運営されています。桃紅氏に傾注されたきっかけは何だったのでしょうか。



桃紅館は1,000点を超す桃紅氏の作品を所蔵
※特別に許可を得て撮影しています。



篠田桃紅氏の作品を常設する「岐阜現代美術館 桃紅館」

●岡本：桃紅さんのお父様が岐阜の芥見出身というご縁があり、彼女の作品が持つ感性が、私たちの事業の成り立ちやビジネスモデルに通じるものを感じたことがきっかけです。本社のもとの地名は「倉知向山」でしたが、桃紅さんが岐阜にゆかりがあるということと、関市役所と提携して美術館を運営していた経緯もあり、関市と協議して「桃紅大地」に変更になりました。「桃紅大地(とうこうだいち)」の「大地」は、私の先代である岡本太一の名にちなんで、社内では「大地(たいち)」と呼んでいます。アートに触れることで、社員にとってもここが憩いの空間であり、新しい発想を生む場所であってほしいと考えています。

—— 2026年、新たな動きもあるとお聞きました。

●岡本：4月1日に全社のイノベーションを美濃工園から起こしていくことを目的とした新たなオフィスとして「イノベーションセンター」のオープンを予定しています。

香りを見る。新しい癒しのかたち 《火山の形をしたお香立て》



●逆流香型



●コーン型



●スティック型

新入社員が発案したお香立て「焚香(たこう)」。一般消費者向け市場への新たな挑戦として誕生した。お香の種類で煙や灰の動きが変わり、火山の多彩な表情を香りと共に楽しめる。

—— 最後に、これからの展望をお聞かせください。
グローバル競争が激化する中で、どのような未来を
描かれていますか。

●岡本：グローバルに通用する会社であり続けることが不可欠です。現在は中国、アメリカ、シンガポールに拠点を置いています。私たちの強みであるメカニカルとエレクトロニクスを融合させた、世界に通用する商品をさらに生み出していきます。

世界を見据えた技術・商品開発を加速させつつ、足元では農業を通じて社員の雇用を守り、アートを通じて心の豊かさを育む。伝統を守りながら自己革新し続ける、そんな「鍋屋バイテック会社」としてのまとまりを大切に、これからも挑戦を続けていきたいですね。

—— 460年の重みと、未来への軽やかな挑戦。その融合こそが貴社における経営の真髄だと感じました。本日は貴重なお話をありがとうございました。

(対談日:2025年12月9日)



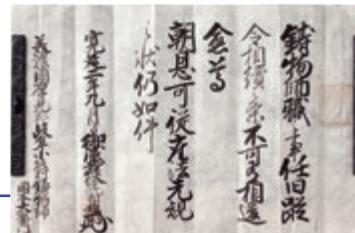
本社にて

* 取材後記 *

創業460年を超える歴史を持つ同社は、常に時代の先を見据え、鋳物という伝統技術と最先端のテクノロジーを融合させ続けています。その独自の経営哲学は、社名の呼称から社員の趣味の推奨、さらには岐阜でのコーヒー栽培に至るまで、一貫した「共同体」としての思想に裏打ちされています。250社の協力パートナー先との絆を深め、商品の廃番をせず、社員の趣味まで応援する。一見、効率性とは逆行するように見えるそれらの施策こそが、20万点もの商品群と強固な組織力を支えていることを、強く実感しました。

会社概要

- 本社・関工園／岐阜県関市桃紅大地1
- 創業／1560年(永禄3年) ●設立／1940年(昭和15年)
- 事業内容／機械要素部品の開発・製造・販売、鋳物ソリューションの提供
- グループ会社／NBKホールディングス株式会社、NBKマーケティング株式会社、鍋屋百迪精密機械(蘇州)有限公司、鍋屋百迪精密機械(常州)有限公司、NBK America LLC、NBK ASIA MANAGEMENT PTE. LTD.



朝廷から授かった「御鋳物師」の免状

